広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	「ICT利用の日本語教育を考える会」2022年度
Author(s)	迫田, 久美子; 柳本, 大地
Citation	広島大学留学生教育 , 27 : 64 - 66
Issue Date	2023-09-30
DOI	
Self DOI	10.15027/54873
URL	https://doi.org/10.15027/54873
Right	
Relation	

「ICT 利用の日本語教育を考える会」2022 年度

迫田久美子・柳本大地

１．はじめに

「ICT 利用の日本語教育を考える会」は、2017 年 11 月に発会し、今年度までの 6 年間で計 8 回の活動を行った。本会は、ICT を通して中四国の地域が繋がり、ネットワークを形成することで留学生への日本語教育の活性化、拡充化を図るという趣旨で、広島大学の日本語教員が中四国の日本語教育関係者に呼びかけ、活動を開始した。

初回のセミナーでは、世界中がコロナ禍で混乱した 2 年前、オンラインによる会議や Zoom を取り上げ、新しい ICT 教育の学びのスタートをきった。その後、「ICT を使った日本語指導の技術」「ビジネス日本語」「漢字教育」「社会文化学における日本語教育」など、幅広いトピックも取り入れながら、毎年１～２回の活動を行ってきた。

2022 年度のセミナーは、「ICT を利用した日本語教育の実践」をテーマに荻野雅由氏と横溝紳一郎氏を迎え、11 月 20 日（日）、13：00～16：20、オンライン（Zoom）と対面のハイブリッド形式で開催した。次節では、各発表について報告する。

２．「ICT を活用した日本語教育の実践：ニュージーランドの日本語教育、アドボカシー、Well-being という視座」

荻野雅由先生（カンタベリー大学・ニュージーランド）

荻野雅由氏は、カンタベリー大学人文学部の Lecturer で、日本語教育と日本語を第二言語とする習得研究を専門とし、ニュージーランドの大学教員トップ 10 の一人に選ばれている。

この講演の目標は、ニュージーランドの日本語教育における ICT 活用の現状を示し、日本語学習者数の減少への対策として「つながりと越境」を中心に据えた日本語教育アドボカシーと実践について報告し、さらに、ポストコロナにおけるウエルビーイングという視座からのことばの学びと教師の幸せについて、参加者と共に考えることであった。

講演内容は、まず、ニュージーランドの教育の現状について紹介があり、中等教育では「飛び級」があること、高等教育ではパートタイムで学ぶ学生も多く、25 歳以上の大学入学者の割合（32.6%）が世界で 3 番目に高いことなどを述べ、ニュージーランドの教育の特徴として「自由度が高く、緩いこと」「やり直しがきくこと」「多様性に対応していること」の 3 点を挙げている。

日本語教育については、国際交流基金の調査（2020）によると、日本語学習者数が世界で13番目であるものの、近年では1996年から学習者数が減少傾向にあることを示し、その要因について国家言語政策や外国語学習の軽視、日本語から中国語へのシフトによる学校や政府のサポートの減少などを挙げている。そして、レベルを超えて教師が集まり、連携して活動していくことが地域での日本語教育の普及、推進につながるとし、「つながり」の重要性を主張している。その「つながり」「越境」「ICT」の実践として、ニュージーランド全土の日本語学習者がコースや高校、大学を越え、ダンスでつながるプロジェクトや世界の日本語教育に関わる人々がZoomでつながる「日本語教育・オンライン・ワールドカフェ」を紹介した。

そして、カンタベリー大学の日本語プログラムにおけるICTの活用例を紹介し、さらにポストコロナで求められる教師の在り方に話を進めた。そこから、さらに肉体的、精神的、そして社会的にも、すべてが満たされた状態で健康であることを目指す、「ウエルビーイング(Well-being)」の考え方を紹介し、日本語教育におけるウエルビーイングの考え方として「人生を豊かにするための日本語教育」を示し、学習環境をどのようにデザインするかという考え方から、「日本語」から「教育」への視点のシフトの必要性を示した。

言語教示の日本語教育から人生を豊かにするための日本語教育へのパラダイムシフトは、これからの共生社会に向かう日本において教育の在り方を考える重要な視点であると感じた講演であった。

３.「人を育てる外国語教育」

横溝紳一郎先生（西南学院大学）

横溝紳一郎氏は、広島大学でも教鞭をとられたが、現在は西南学院大学の教授で、教師教育学と外国語教育学を専門としており、近年ではアクション・リサーチやアクティブ・ラーニングに関する活動を行っている。

今回の講演の目的は、外国語教育という観点から「どうすれば日本語力・英語力を伸ばすことができるのか」に焦点を当てて行った「日本語力・英語力プラスアルファの能力を伸ばす授業デザイン」の取り組みを紹介することであった。今回は、Global Communication Studies という異文化間コミュニケーションの授業の実践を紹介し、授業で扱った課題や活動方法、学生たちのアンケート結果に基づき、講演を行った。

授業内容を英語で理解し、理解した内容を学生同士で確認し、お互いの考えを英語で共有することを基本方針とし、(1)全員の参加(2)全員がディスカッションの内容を予め用意(3)制限時間を意識する (4)聞き手に分かりやすく話す (5)他の人の話を聞く態度を持つ (6) 感情的にならない、の6項目の注意事項を示した。授業では「他の人のためにドアを

開ける」「列に並ぶ」「公園での親同士の会話での子どもの呼称」「子どもとの添い寝」などのトピックを提示して活動を行っている。

学期末では、①この授業で最も興味深い学びは何か　②異文化間コミュニケーションはこれからのあなたにとって、どのように重要か　③異文化間相互理解能力をどのようにして向上させることができるのか、から課題を選んで授業と関連づけるプレゼンテーションを課し、発表者以外の学生にはそのプレゼンテ―ションに対するフィードバックを英語で行わせた。さらに、アンケートを行い、学生や多様な文化とのつながりなどについて調査を行った。

講演では、具体的な学生たちのアンケート記述を紹介し、多くの学生たちから好評を得ていたことが示され、英語を使って、多様な文化や人々と繋がる能力を伸ばすという当初の目標が達成されたことが聴衆である私達にも伝わった。

最後に横溝氏の研究室のロッカーに掲示してある言葉を紹介して、印象的な講演を終えた。

「授業は教師も生徒も同時に勝利者になれる。その気になれば、こんな楽しいことはない！」

4. おわりに

今回の研究会では、海外と国内から講演者１名ずつを招聘し、荻野氏にはニュージーランドの教育事情から日本語教育、そしてウエルビーイングまでの広い流れを、横溝氏には１つの授業の取り組みから考えるべき授業の在り方の提案を聞き、それぞれ異なったアプローチによる成果を学ぶことができた。対象もアプローチも異なるが、両氏に共通している点は、授業に対する情熱とさまざまな「つながり」を重視していることであった。日々の授業計画に忙殺されるのではなく、少し視線を上げ、授業全体を俯瞰する気持ちで臨むことの必要性を感じた。

横溝氏の講演の最後に、「楽しい授業よりうれしい授業の方が大切！」という言葉が印象的であった。「楽しい授業」は外からの要因によってもたらされることが多い感覚であり、学習者がやや受動的であっても成立するが、「うれしい授業」は学習者が「わかる」「できる」等によって自ら喜びを身体で感じる授業であると定義し、内在的・内因的な感覚を有する能動的な取り組みを必要とする「うれしい授業」を重視している。今回の両氏の講演から、改めてこの ICT 利用の日本語教育を考える会も「うれしい研究会」を目標に、さまざまな取り組みを行っていきたいと感じた。

引用文献：

国際交流基金（2020）『2018 年度　海外日本語教育機関調査』p.15. 国際交流基金